



## カムリウミスズメの保護における門川町の取組み

窪田麗子

門川町社会教育課（宮崎県東臼杵郡門川町）

E-mail : reiko-k@lep.bbq.jp

### 摘要

今日は、海外から多くの方々から門川町に来てくれて本当にうれしい。皆さんが研究者の発表や役場の人の話を聞きに来て下さったことに感謝している。門川町は人口約 18,000 人の小さな町である。私は 1989 年に門川町に入庁した。その頃はカムリウミスズメについてほとんど知られていなかった。1994 年に門川町がカムリウミスズメを守る取組みを意識的に始めた。この鳥は 12 月から 5 月初旬まで、繁殖のため門川町にやってくる。崖や島々のある海岸線は日豊海岸国定公園の一部で、カムリウミスズメの理想的な営巣環境である。枇榔島で特によく見られる柱状節理には小さな隙間が多く、この鳥が好んで営巣する。2005 年、この鳥の重要性を鑑みて門川町の鳥に制定された。それ以降、町の教育と保全プログラムは、この鳥を取り巻く問題への関心を高めている。町の政策転換は徐々に進み、そこには多くの人々の努力があった。1987-1988 年に、日本野鳥の会宮崎県支部の中島義人氏が調査を行っている。当時、カムリウミスズメは稀な鳥とされていたが、特に保全が必要とは思われていなかった。1989 年から中村豊氏によって、その後 1993-1998 年には東邦大学の大学院生の小野宏治氏によって、継続的な研究が始まった。彼らの研究により、門川はカムリウミスズメの世界一の繁殖地であることが明らかとなった。彼らの研究は海外の研究者の注目も集めることになった！1994 年にはカムリウミスズメの本格的な保護が始まった。役場の者と政策担当者はこの鳥に関する教育を受けた。中村氏が講義を行い、この鳥が直面する脅威について話し合った。当初、保全と観光課との間で、優先順を調整するのは困難であったが、徐々に役場全体に理解が広まっていった。町役場の支援を受けて、地元住民への啓発活動も行った。枇榔島を訪れる遊漁者には看板やステッカーを使い、近隣にいるウミスズメとうまく付き合う方法を教育した。渡船業者には待合室や船にポスターの掲示を依頼するとともに、釣り人にはステッカーを配布して島を綺麗に保つこと、ウミスズメの捕食者であるカラスを呼び寄せないためにゴミを持ち帰ることを理解してもらった。1998 年には地元の小中学校での教育キャンペーンを開始し、小冊子やポスターを配布して環境学習や地域を知る学習に組み入れた。2001 年 3 月からは、町民たちがこの鳥を直接認識し、地域の環境について知見を深めることができるように、講演会や観察会を行っている。2005 年にこの鳥は公式な町の鳥に制定されたので、私達はお祝いとして学校向けの模型や絵本を制作した。現在、小中学校の生徒は郷土学習の一部の中で、私達が作ったテキストで地元の宝物について学んでいる。このプログラムを通じて、門川町の未来を担う子供たちが、豊かで美しい自然環境とそこに住むカムリウミスズメを守り続けてくれることを願っている。

**キーワード：**カムリウミスズメ、枇榔島、門川町、学校教育、環境保全

### はじめに

今日は、海外の方も門川町に来てくれて本当にうれしい。こんなにたくさんの方が、このシンポジウムで、研究者の人たちの話や私たちの話を聞いてくれることは、とてもありがたい。

門川町は、人口約 18,000 人の小さな町である。日頃、門川町という小さなエリアで過ごしているので、自分の住んでいる町がどこにあるか意識したことはないと思うが、ここで門川町の位置を確認しておきたい。世界の中の太平洋の西端にある日本の、九州の、その中の宮崎県であり、その県北の門川町。門川町は、小さな町という認識だが、地球規模の広い視野で、意識的に、わが町を見ることは必要であり、大切な事だと思う。

私が門川町に入庁したのは、平成元年（1989）。そのころは、門川町では、ほとんどカムリウミスズメのことは知られていなかった。門川町が意識的にカムリウミスズメを守る取組みを始めたのは、平成 6 年（1994）のこと。これまで、研究者の方々がお話しになったように、カムリウミスズメは、毎年 12 月から翌年の 5 月初旬にかけて、繁殖のために門川にやってくる。門川湾は、日豊海岸国定公園にあり、尾鈴酸性岩の柱状節理が特徴の海岸や島、岩礁に恵まれた美しく豊かな海である。柱状節理の岩場はすき間が多く、カムリウミスズメの営巣に適したところで、広い範囲でカムリウミスズメが生息できる場所である。港が二つあるが、その港内にカムリウミスズメが入ってきたりすることもある。

門川町では、平成 17 年（2005）、町政施行 70 周年を機に、カムリウミスズメが「門川町の鳥」に制定され、本種の保護と啓発の活動が広がっている。ここに至るまでには、多くの方の力があつた。ここでは、それについて、



説明していきたい。

### 世界一の繁殖地、枇榔島

門川町教育委員会が、カンムリウミスズメが門川町に生息していることを知ったのは、昭和 62 年ごろ（1987）から 63 年（1988）にかけてのことである。日本野鳥の会宮崎県支部、中島義人氏の調査が行われている。当時の教育委員会職員が中島氏と共に枇榔島に渡って撮った写真と記録が残っている。

おそらく、それまでに漁業者の方、漁師さん達は、カンムリウミスズメの存在を知っていたと思うが、鳥の名前や、その鳥が天然記念物の、貴重な鳥であるとは知らなかったと思う。また、行政としても、カンムリウミスズメを保護するということを、特に認識していなかった。

平成になって、中村豊氏が本格的に調査をされるようになり、現在まで継続されている。平成 5 年（1993）から平成 8 年（1996）にかけては、当時、東邦大学の大学院生だった小野宏治氏が、枇榔島に泊まり込んで的集中的な調査を行った。これによって、枇榔島が世界一の繁殖地であることが示された。平成 6 年（1994）1 月にアメリカのサクラメントで開催された「稀少ウミスズメ類の行動、生態、及び現状」というシンポジウムで、中村氏と小野氏が共同で行った「カンムリウミスズメの現状と繁殖生態」という招待講演は、大変多くの質問や関心を集め、海外の研究者たちの注目するところとなった。



図 1. 枇榔島(上)とカンムリウミスズメ(下)  
Fig. 1. Birojima and Japanese Murrelet

### 門川町の取組み

平成 6 年 2 月には、太平洋海鳥グループのジョン・フリーズ氏が調査に加わり、4 月には、太平洋海鳥グループのジョン・パイアット氏、ハリー・カーター氏らが門川町役場に来庁し、教育長と会見し、門川町の枇榔島が、カンムリウミスズメの繁殖地として大変重要であり、保護の必要性があることを説かれた。その時に、シンポジウムの提案をされたことは、はっきりと覚えている。

門川町では、この訪問を受けて平成 6 年 5 月に初めての関係各課の会議を行った。この会議では、中村氏にカンムリウミスズメについて、講義をしてもらい、その保護や活用のための問題点や対応を話し合った。最初のうちは、各課の役割の範囲で、情報を共有しながら、保護と活用を行っていくことは、大変難しいと思われた。しかし、繰り返し会議を行っていくうち、役場内でのカンムリウミスズメへの理解が広がっていった。

併せて町民への啓発発動をおこなった。はじめに枇榔島での遊漁者にむけて、看板とステッカーで保護を呼びかけた。そのために、町内の渡船業者に協力をお願いして、船や待合所への看板掲示と遊漁者へのステッカー配付をしてもらった。

看板には、捕食されたカンムリウミスズメの卵とか、捨てられた撒き餌の写真など

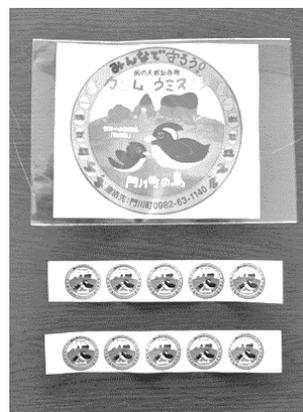


図 2. 最新版のステッカー・シールと保護啓発看板  
Fig. 2. Stickers and a poster (latest version)



を掲載し、カンムリウミスズメが貴重な鳥であること、枇榔島が世界一の繁殖地であること、島の環境を守る、天敵のカラスを呼び寄せないためにゴミは持ち帰るなどのアピールを行った。

また、図書館の貸し出しカードや、貸し出した本を入れるバッグにもカンムリウミスズメのイメージキャラクターを採用したり、門川町役場の各課が町民向けに発行するパンフレットや広報用に配布する賞品類(缶バッジ、ティッシュ、ボールペン、エコバッグなど)にカンムリウミスズメのイメージキャラクターを入れることが多くなった。それぞれが自由に作成し、キャラクターはまちまちであったが、平成24年(2012)に、町民に原画を募集して、カンムリウミスズメをモチーフにした門川町のマスコットキャラクター「かどっぴー」が誕生し、ペアの「がわっぴー」も登場して、門川町のPRやカンムリウミスズメの保護啓発に活躍している。

町役場の取組みが始まると共に、漁業協同組合や観光協会の取組みも始まった。門川漁業協同組合青年部がカンムリウミスズメの絵柄のついたTシャツを作る、観光協会がかどっぴーのポロシャツを作る、観光パンフレットにカンムリウミスズメの紹介を掲載する、漁協が海の生き物とカンムリウミスズメの学習パンフレットを発行する、といった様々な取組みが行われることで、カンムリウミスズメのことが町内外に広く知られるようになった。

カンムリウミスズメウォッチングへの関心も高まり、県外からの問い合わせが増え、時には海外からの問い合わせも来たりするようになり、観光におけるカンムリウミスズメの保護についての課題も浮き彫りになってきた。観光カンムリウミスズメウォッチングのルール作りが必要だが、関係団体の協議や学習活動を進めるまでには至っていなかった。

### 教育の取組み

平成10年(1998)2月には、町立小学校、中学校向けのチラシとポスターを手作りで作成し、配付した。それを契機として、教育現場では、総合的な学習の時間を使って、環境学習や地域を知る学習と合わせて、カンムリウミスズメの学習が行われるようになった。この年の6月には、門川小学校の田ノ上久美子教諭が、小野宏治氏とやり取りしながら、4年生児童と共に、カンムリウミスズメ絵物語制作に取り組み(図3)、それが町政施行70周年事業で発行した絵本の元となった(図4)。

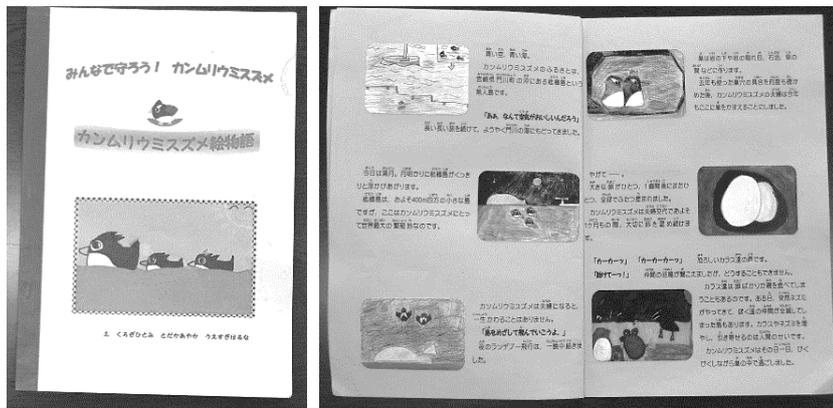


図3. 門川小学校児童制作のカンムリウミスズメ絵物語  
Fig.3. Picture book of Japanese Murrelet produced by Elementary school students in Kadogawa-cho

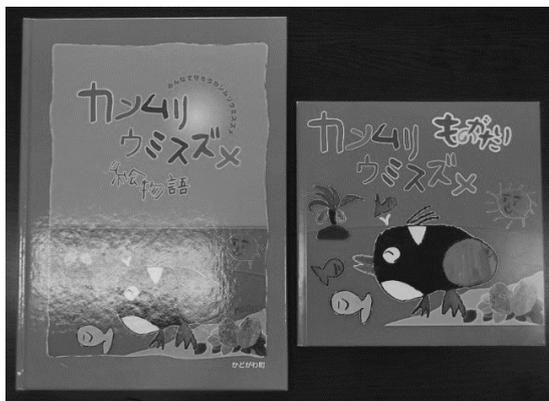


図4. カンムリウミスズメ絵物語と幼児向けの絵本  
Fig. 4. Picture book of Japanese Murrelet (left) and book for little children (right)



平成 13 年(2001)3 月からは、中村氏に話しを聞く保護啓発講演会や海上でのカムリウミスズメ観察会を始めた。講座には、なかなか人が集まらなかったりしたが、観察会には多くの人が集まってくれた。特に子どもたちへの興味を惹くことができた。観察会の後に海岸清掃などを行ったりもしている。そのほか、教育委員会が主催して実施する子どもたちを対象とした体験イベントなどでも、カムリウミスズメに関わる学習や観察会、海岸清掃などをプログラムに取り入れることが定着していった。

そうした取り組みの積み重ねのなかで平成 17 年 (2005) の町政施行 70 周年を契機として、「町の鳥」制定に至ることができた。カムリウミスズメの保護啓発と、カムリウミスズメによる地域振興に取り組み、記念事業として、絵本「カムリウミスズメ絵物語」の出版、木彫りの模型制作、ステッカー、シールの製作などを行い、啓発活動に使ったり、学習の素材として活用してもらうため、町内公共施設や学校に贈呈した。絵本は、幼児向けにしたものも制作し、その年に生まれた赤ちゃんに渡す「ブックスタート」の一冊に取り入れられたりもした。

学校教育では、平成 25 年 (2013) 3 月から、「ふるさと教育」として、カムリウミスズメについての学習をカリキュラムに取り入れることになった。

基本的に小学 4 年と中学 2 年で学習を行う。教材として「門川町の鳥 カムリウミスズメ」を発行し、学校へ配布を行っている(図 5)。このテキストは、シンポジウムの参加記念品として配布している。小さなテキストだが、中村豊さん、福島英樹さん(当時、宮崎県総合博物館勤務)に執筆、監修をお願いし、イラストを関希美さん(フェニックス自然動物園勤務)にお願いして制作したもので、カムリウミスズメのことを知り、守ること、枇榔島のこと、門川町の取組みなどイラストや写真入りでわかりやすく解説したものである。

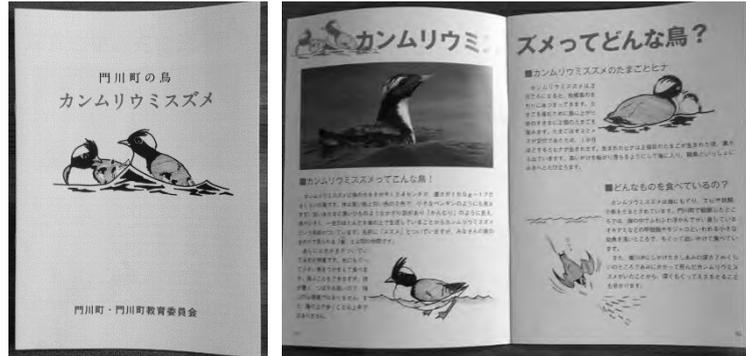


図 5. 「ふるさと教育」テキスト 門川町の鳥カムリウミスズメ  
Fig. 5. Loco education Book “Japanese Murrelet, symbol bird of Kadogawa.

### カムリウミスズメの調査と調査への協力

平成 6 年 (1994) に、太平洋海鳥グループの方たちが、門川町を訪問されたのをきっかけとして、門川町での調査に、国内の研究者や団体、海外の研究者、団体が調査に関わるようになってきた。調査は、主に中村さんを中心にして実施されていたが、時には複数の調査申請が入るような年もあった。複数の調査者が、同じような調査項目を、別々に調査するのは、カムリウミスズメやその他の枇榔島に生息する鳥類にとっても負担になると思われたので、そのような場合には、調査者同士の情報共有が出来ているかどうか、問い合わせて確認したりもしてきた。今後も、限られた期間の調査が、研究者同士の連携で、枇榔島への負担を最小限にしてできるよう、行政として指導できればと思っている。



図 6. 調査結果の報告会 (平成 25 年度)  
Fig. 6. Meeting of survey result

本格的な海外からの調査協力は、平成 23 年 (2011) 4 月

19 日から 25 日にかけて、日本海鳥グループのカムリウミスズメ個体数調査チーム(現、海鳥保全グループ)によって、スポットライトサーベイを用いたカムリウミスズメの個体数調査が実施され、同手法がカムリウミスズメにも有効な調査手法であることが明らかにされた(Whitworth et al. 2014)。

スポットライトサーベイを用いた調査は、引き続き平成 24 年 (2012) にも行われ、1,200~1,800 ペアが繁殖しているものと推定された(Carter et al. 2013)。平成 25 年 (2013) には、アメリカでは標準的に行われている、営巣モニタリングが行われ、平成 25 年 4 月 5 日に 3 年間のまとめが発表された(図 6)。その結果、1995 年の 1500 ペア(小野 1995)と同程度の個体数が保たれてはいるものの、卵の捕食があることなどが報告された(Whitworth et al. 2014)。この間、韓国でもカムリウミスズメの生息と繁殖が確認されていたため、平成 24 年のスポットライトサーベイには、韓国の研究者 3 名が加わった。それをきっかけに、平成 24 (2012) 8 月に新安郡で行われた「第 6 回国際渡り鳥シンポジウム」に招待を受け、門川町教育長と担当職員が出席した。その後、韓国の研究者と大槻都子



氏を中心とした日本の研究者の間で、カンムリウミスズメに関する研究交流がなされている。

このころから、門川町職員による枇榔島での調査協力も積極的に行われるようになってきた。それまで、担当職員や興味のある職員が、個人的に調査協力に関わっていたが、平成 25 年（2013）8 月-9 月のカンムリウミスズメ個体数調査チームによる枇榔島におけるネズミの生息調査には、複数の門川町職員が公務として携わった。

平成 28 年度（2016）からは、行政、民間、研究者による委員会を立ち上げ、横のつながりを強化し、一体的な活動を行うことを目的とした体制づくりに取り組み、「カンムリウミスズメを核としたまちづくり推進プロジェクトチーム」を立ち上げた。このプロジェクトに関わって、門川町の若手職員が枇榔島での調査に協力を行っている。

門川町教育委員会では、これまで、講座や観察会で、町民へのカンムリウミスズメの啓発活動を行ってきた。その結果として、カンムリウミスズメのことは町民によく知られるようになってきた。しかし、これまで調査に関わってきた研究者や職員が、これからはずっと調査や保護活動を続けられるものではない。これからはこの取り組みを引き継いでくれる人材を育てなければならないというのが喫緊の課題である。そのため、数年前から、カンムリウミスズメ倶楽部という名称で、カンムリウミスズメを守るための生涯学習講座を開いている。今後は、この講座を受講した人たちを中心に保護活動を行い、将来的には、継続的なモニタリングが出来るようなグループが結成できれば良いと思っている。今のところ、少人数の参加だが、このシンポジウムをきっかけとして、興味を持ってもらい、毎年、定期的に巣の様子を調べたりするなど、カンムリウミスズメを見守る活動をしていける団体になることを期待している。

#### おわりに

このレポートは、平成 29 年（2017）3 月 18 日～19 日に門川町で開催された「カンムリウミスズメシンポジウム 2017in かどがわ」において発表したものに説明不足だったところ、話し足りなかったところを加えてまとめたものである。

カンムリウミスズメとの約 30 年の関わりは、門川町に素晴らしい宝をもたらしてくれた。門川町の小学校、中学校では、総合的な学習の時間を使ってカンムリウミスズメについて学んでいることを紹介したが、門川町の未来を担う子どもたちがこのような学びを通じて、カンムリウミスズメに象徴される豊かな、美しい自然環境を守る活動を続けてくれるようになること、門川町をもっと素晴らしいまちにしてくれることを楽しみにしている。

#### 引用文献

- Carter, H., D. Whitworth, Y. Nakamura, M. Takeishi, S. Sato & K. Otsuki. 2013. Surveys of Japanese Murrelets (*Synthliboramphus wumizusume*) at Birojima, Miyazaki-ken, Japan, in 2012. Unpubl. report, Japan Seabird Group, Hokkaido University, Hakodate, Hokkaido. 37 pp.
- 小野宏治. 1995. カンムリウミスズメ : 小野宏治 (編集). 希少ウミスズメ類の現状と保護. 日本ウミスズメ類研究会, 東京. Pp. 117-124. [In Japanese]
- Whitworth, D., H. Carter, Y. Nakamura, K. Otsuki & M. Takeishi. 2014. Hatching success, timing of breeding, and predation of Japanese Murrelets (*Synthliboramphus wumizusume*) at Birojima, Miyazaki-ken, Japan, in 2013. Unpubl. report, Japan Seabird Group, Hokkaido University, Hakodate, Hokkaido, Japan. 52 p.



図 7. 調査団の町長表敬訪問（平成 25 年度）  
Fig. 7. Courtesy visit to mayor of Kadogawa



図 8. かどっぴー・がわっぴー : 岩田成司さん制作（庵川在住）  
Fig. 8. Kadoppi and Gawappi: produced by S. Iwata (lives in Iorigawa; photo: Kadogawa-cho)



## Efforts of Kadogawa-cho on the conservation Japanese Murrelet

Reiko Kubota

Kadogawa Social Education Division : Kadogawa-cho, Higashiusuki-gun, Miyazaki-ken, Japan

I am so happy that so many foreigners came to Kadogawa today. I am grateful that you have come to listen to researchers' presentations and stories of local officials.

Kadogawa is a small town with a population of approximately 18,000 people. I moved to Kadogawa in 1989. In those days, almost no one knew anything about Japanese Murrelets. It wasn't until 1994 that Kadogawa began conscious efforts to protect these birds. From the December until early May these birds gather here in Kadogawa to breed. Our coastlines with its rocky cliffs and islands—part of Nippou Kaigan National Monumental Park—is perfect nesting habitat for Japanese Murrelets (called Kanmuri Umisuzume in Japanese). The columnar rocks filled with tiny crevices—especially those on Birojima—are exactly where the birds want to build their nests. As a recognition of the birds' importance, they were named the official birds of Kadogawa in 2005. Since then town education and conservation programs have increased awareness of the issues surrounding the birds. The town's policy shift was gradual and the work of many people. Yoshito Nakajima of the Wild Bird Society of Miyazaki studied the birds from 1987-1988. At the time it was known that the Japanese Murrelet was rare, but we thought it did not need of special conservation. Starting in 1989 the birds were studied continuously—by Yutaka Nakamura and later (1993-1998) by Koji Ono, a Toho University graduate student. Their research established that Kadogawa was home to best breeding ground in world. Their research even drew the attention of researchers overseas! In 1994 efforts to protect the Japanese Murrelet began in earnest. Town officials and policy makers were educated about the birds. Mr. Nakamura gave a lecture and programs about the threats the birds faced were discussed. At first it was difficult to reconcile the priorities of the Conservation and Tourism departments, but slowly the entire town hall staff got on board with the program. With the support of the town government we then worked to spread awareness among local residents. We used signboards and stickers to educate recreational fishers visiting Biro Island about ways to safely interact with their Murrelet neighbors. Fishing companies were asked to display posters in waiting rooms and on their boats, as well as to distribute stickers to fisherman so they would understand the importance of keeping the island clean and bringing all the trash back to shore—litter attracts crows which are predators of the Murrelets. In 1998 we started an education campaign in local elementary and junior high schools, distributing leaflets and posters and incorporating the birds into the curriculum as an element of ecological and local studies. Since March 2001 we have been holding lectures and organizing observation trips so that townspeople can appreciate the birds firsthand and deepen their knowledge of this aspect of their local environment. In 2005 the bird became the official town bird and we celebrated by producing models and picture books of birds for schools. Today, as part of our “hometown learning”, elementary and junior high school students learn about these local treasures thanks to textbooks that we produced ourselves. Through these programs I hope that these children who are responsible for the future of Kadogawa will continue to protect our rich and beautiful natural environment—and the Japanese Murrelets that live there.

**Key Words:** Japanese Murrelet, Birojima, Kadogawa town, Education, Environmental conservation